

明治期における綿ネルの機械捺染の導入とその影響

日本女大家政 ○櫻井理恵 佐々井啓

〔目的〕 明治期における産業の近代化の新たな観点として綿ネルの機械捺染についてとりあげる。綿ネルは国内生産が不可能であった羊毛製のフランネルを模倣したものであるが、染色、起毛の耐洗濯性の低さが指摘されていた。一方、この点に優れた外国製品が明治30年からドイツを中心に輸入され明治33年にはピークに達する。この様な時代に機械捺染が導入された。これは単に産業界の近代化だけではなく、染色製品の改良や、さらには衣生活にまで何らかの影響を与えるものであると考え、この点について研究することとした。

〔方法〕 当時の雑誌「染織時報」「染織新報」「綿ネル新報」を中心に、専門書、新聞、統計年鑑、小説等で補足し、捺染に関する情報、展望、製品、使用法についてとりあげる。

〔結果〕 研究により以下3点が明らかになった。

- 1、綿ネルは低価格、使用頻度の高さに加え、表面が起毛のため、精密な模様等の捺染は不必要なため、機械捺染が導入し易い素材と考えられていた。
- 2、多くの人に対応できるために、模様は縞を中心とした無難なもの、色彩は黒、茶、鼠が用いられた。意匠は本ネルの模倣を目的とし、一般からの公募も行われた。
- 3、機械との適合性から輸入の合成染料を使用した。

綿ネルは内着という用途から低廉な価格と染色堅牢度双方が必要とされた。しかし科学技術の遅れから、堅牢度の向上のためには高額な染料が必要であり、利益に結びつかない。一方、機械捺染の導入は染色業における大量生産をもたらし、その販売のため、堅牢度等品質や意匠に消費者のニーズが反映され、それが衣生活の向上へとつながったと思われる。